陳舜臣さんを語る会通信

NO.82　Sep.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年9月10日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

1971年以降の推理中・短編集2冊『異郷の檻のなか』、『夜の歯車』

本通信号No.77～No.81で、陳舜臣作品の最初期10年(1961-70)の推理小説を取り上げてきました。続いて、1971年以降の推理小説を取り上げてまいります。まず、本号では推理小説集２冊、『異郷の檻のなか』(1971 中央公論社)と『夜の歯車』(1971 実業之日本社)を紹介いたします。

（編集委員　橘雄三）

1971以降　推理小説(単行本刊行順)

西暦	推理小説	通信
1971	北京悠々館	80
	★異郷の檻のなか	82
	★夜の歯車	82
	★崑崙の河	
	★六甲山心中	75
	★なにも見えない (文庫:望洋の碑)	
	★南十字星を埋めろ	
1972	★笑天の昇天	
1973	☆長安日記-賀望東事件録	53
	失われた背景	57
	虹の舞台	51
	☆柊の館	63
1975	☆青春の烙印-神田希望館	63
1977	闇の金魚	
1978	☆漢古印縁起 (原題:桜獅子名品帖)	63
	燃える水柱	76
1979	★夏の海の水葬 (文庫:神戸異人館事件帖)	64
1986	★クリコフの思い出	
	★崩れた直線	52
1990	★異人館周辺	66
	★杭州菊花園	66
1991	★海の微笑	
	★三本松伝説	71
1992	★神獣の爪	52
2002	★わが集外集 (文庫:獅子は死なず)	60

★は短編集　☆は連作集　無印は長編

左の表、1960年代、70年代と多かった推理小説が、80年代に入ると激減しています。

この現象と理由について、本通信No.80で、『凍った波紋』各務三郎氏「解説」を中心にみてきました。推理小説から普通小説(小説一般)への移行現象はわかるのですが、移行理由については今一つ納得できませんでした。引き続き、考えていきたいと思います。

『異郷の檻のなか』「あとがき」抜粋

小見出しと傍線は編集委員の加筆

中編小説は独立した一つのジャンル

ここに百枚前後の小説を四編あつめた。中編集ということになろうか。すべて中国および中国人に、なんらかの意味で関係のある作品ばかりである。

現在、小説という共通の名詞に、短編とか長編といったことばをかぶせるので、語感からもおなじ種類のものと考えられやすい。だが、短編小説と長編小説はまったく別種のものと理解したほうがよいであろう。

ところが百枚前後の小説となれば、長・短編の中間にあたるのだが、短編小説と長編小説を別種のものと考えた場合、そこに中間はありえないことになる。

中編小説も長・短編小説とは異なるものと考えねばならない。それなのに、私はながいあいだぼんやりしていて、そんな意識を持たずに、中編小説を書いてきた。

中編小説を、長い短編でもなく、短い長編でもなく、それ自体一つの独立したジャンルだと、はっきりきめてかかったのは、ごく最近になってからだった。本書におさめた諸作品は、そうした意識を持つようになってから書かれたものだ。そのような意識はむしろないほうがよいのではあるまいかと、いまでも、ときどきおもうことがある。ゆっくりと時間をかけて吟味すべき問題であろう。

本書収録作品についての補足

なお本書に収録した作品のなかには、事実にヒントを得て書かれたのもあるが、モデルというほどには密着していない。本筋において、フィクションである。モデルに対する興味で読まれるのは、作者の本意とするところではない。

地名については、『永臨侍郎橋』は架空のもので、広西省桂林の近くには永臨という町はないはずである。すくなくとも、ふつうの地図にはのっていない。やはり桂林の近辺にある臨桂と永福という、二つの小さな町の名から一字ずつ採って、作者がつくった名称にすぎない。ただし、戦時中の上海演劇人の救亡運動のいきさつについての部分は、じっさいの記録に拠った。

四編とも結末のところで、救いをのこしたつもりである。現実直視の不徹底ではなく、作者としては、現代を蔽う退廃の雑草を吹きわけて、新鮮な地膚をみつけようと願ってのことなのだ。

昭和辛亥(四十六年)三月　陳舜臣

中央公論社版表紙

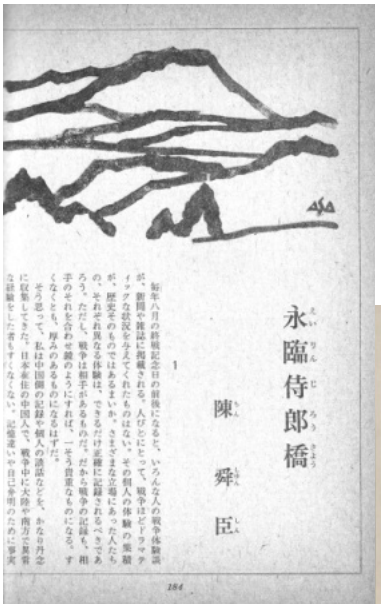
『異郷の檻のなか』収録各編紹介　ほか

『異郷の檻のなか』収録４編の内、「囚人の斧」については、本通信No.５で詳述しています。そちらも併せてご一読願います。

題　初出	『異郷の檻のなか』　各編紹介
いきょうのおりのなか 異郷の檻のなか 『週刊朝日カラー別冊』 昭和45年夏季号	作中時間は1970年。王少燕、アメリカ在住、28歳。王家は、もと、上海有数の富豪。国共内戦のなか、七歳の時、父が殺され財産を奪われる。アメリカW大学で社会学を専攻、大陸横断鉄道に従事した中国人労働者のことを研究している。山口承二、京都の有名な古美術商の次男。王少燕と山口承二はW大学の同窓で、同大学付設東方研究所の同僚。少燕が、サンフランシスコのチャイナタウンのはずれにあるキャセイ・ギャラリーのショーウィンドウで見覚えのあるヒスイの原石を見つけたことから、二人は21年前の事件の謎を追うことに
えいりんじろうきょう 永臨侍郎橋 『別冊文芸春秋』 同45年秋季号	「私」が、香港から万博見物にやってきた旧知の周卓峰を神戸の中華料理店に招待するところから話は始まる。時間は戻り、1943年、広西省の省都桂林に近い町、永臨の町はずれに架かる石橋、侍郎橋の傍らで起こった殺人事件が描かれる。当時、周卓峰は15人の団員を抱える劇団を主宰していた。劇団は、民衆の「抗戦意識高揚」をスローガンに地方を巡業した。そして、永臨に来たとき、事件は起きる。さて、…
しゅうじんのおの 囚人の斧 『オール読物』 同44年6月号	ハイライトの舞台は、呉錦堂の舞子の別荘と松林などその周辺。ここに、よく知られた一枚の写真がある。1913年3月14日、別荘前、居並ぶ神戸華僑、財界名士のなか、前列中央、孫文の横に誇らしげな呉錦堂が写っている。「囚人の斧」は、この写真の裏にあった、それはフィクションですが、一つの出来事、孫文暗殺未遂事件を描く。呉錦堂にその才を認められ、前後して日本に留学した二人の青年、呉育雲と曹永忠の人生の軌跡と心のゆれがテーマです
ふようのつゆ 芙蓉の露 『オール読物』 同46年1月号	1955年、中国の要人、王軌東将軍の未亡人・松尾ふく代(中国名、芙蓉)が、42年ぶりに帰国した。新聞３面の片隅に記事が載るような人物である。早速、「私」は面会を申し込み、実現するが話は聞けなかった。それから３年たったある日、「私」のところに彼女から一通の手紙が届く。手紙によって、彼女の人生が甦る。松尾ふく代は明治28年、東京に生まれた。３歳で父を、11歳で母を亡くし孤児となる。下宿屋を経営する母の従姉に引き取られ、そこで働くことになったふく代は、下宿人で、清国からの留学生、王軌東と出会う。王軌東は日本の士官学校、次いで医学校を卒業、新妻ふく代を伴って、既に中華民国になっていた中国に帰り、北京の陸軍医院に就職する。下宿人時代、王軌東の友人で、ふく代がすごく嫌っていた李恩生が、後々、ストーリーに深く絡む ■王軌東将軍は、陳儀(1883-1950)がモデル

「永臨侍郎橋」の初出は
『別冊文藝春秋』昭和45年秋季号

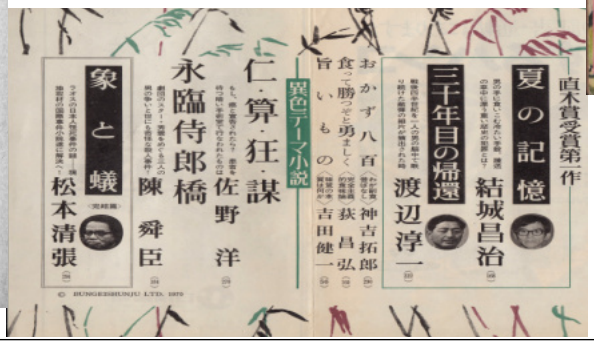
本号の目玉は、川上宗薫「赤い夜」、ついで、結城昌治「夏の記憶」と渡辺淳一「三十年目の帰還」です。



左の画像は、「永臨侍郎橋」の掲載第一頁です。本文を引用します。

永臨も桂林の延長のようなもので、ところどころ、南画のなかにあるような奇峰がにょきりとそびえていたりする。

挿絵は、上枠内、カラー画像のような景色にしてほしかった。



徳間文庫版『夜の歯車』 井家上隆幸氏「解説」抜粋引用 ほか

徳間文庫版『夜の歯車』 井家上隆幸氏「解説」抜粋引用 （傍線は編集委員の加筆）

最近のこの作家の仕事に馴染んでいる読者にとっては、本書『夜の歯車』はいささか奇異な感をもたれるのではないか。

16年前、昭和46年7月に実業之日本社から刊行された、表題作をはじめ五編からなるこの作品集は、もちろんミステリーの色は濃いとはいえ、この作家が特徴とする「神戸在住の中国人」は姿を現さない。ここに登場するのは、一言でいえば「男も女も〈高度成長・繁栄〉の時流から取り残された人間たち」である。

〔狼の血〕の但馬裕一。〔夜の歯車〕の藤堂志摩子。〔違った女〕の芝村二郎。〔暗い海から〕の村上芳子。〔知らぬが仏〕の水村開造。（この段落、次ページの「各編紹介」を参照下さい）

ここに登場する三人の男と二人の女は、いずれも人生の敗残者とはいわぬまでも、まことにウダツのあがらぬ人々であり、だけどそれなりにあれこれ足掻いている人間たちでもある。陳舜臣は、自分の意志を超えた偶然や悪だくみに翻弄されて〝破滅〟にいたるこれらの人々の心情を、若干の諧謔味をこめてえがくことによって、いってみれば〝繁栄〟のいかに虚構であるかをかたっているのである。

そこには、戦争中の〝非日本人〟であったためにうけた差別や疎外感が、敗戦によって逆転したとはいえ、根底ではいぜんとして継続しているという、この作家自身の〝歴史体験〟が投影されていることはいうまでもないだろう。そのことを声高にいうのではなく、陳舜臣は一歩ひいたところで淡々と語り、私たちに〝戦後〟とはなんであったか、何を忘れることによって〝繁栄〟の虚構であることに鈍感でありえたのかを、問うているのである。いわく、「はたしてあなたがたは、こういう人々を愚かな敗残者と嘲笑い捨てることができるのか」と。

その意味では、16年前のこの作品集のもつ重さは、いまや、いや、いまだからなおさらに私たちの肩にぐっとのしかかってくるおもいがするのである。

人間にたいしてある距離をたもちつつその表裏を描きわける柔軟かつ明晰な筆力でもって、人間というものの面白さ複雑さ生きることの哀歓を、しみじみと感じさせてくれる作品集だといってよいだろう。

一九八七年一二　井家上隆幸（いけがみ）

徳間文庫版表紙

『夜の歯車』実業之日本社版（一九七一年）と徳間文庫版（一九八八年）、収録作品の比較

結論から言いますと、実業之日本社版『夜の歯車』（右の画像）には「レンズのない眼鏡」が収録されていますが、徳間文庫版にはありません。このことについて、読んでみて、その理由らしきものがみえました。それは、人権への配慮ではないかと思います。

私（橘）は、大学を卒業して、十年の民間企業勤務の後、兵庫県の公立高校教師になりました。一九七五年のことです。

同和問題、外国人問題、障害者問題など人権意識の高まりのなかで、教育現場も大変だった記憶があります。

実業之日本社版『夜の歯車』には挿絵がついています。週刊誌、月刊誌、新聞など、初出時に挿絵が入るのは普通ですが、単行本では珍しいことです。

「レンズのない眼鏡」の主要登場人物、佐藤信吉は殺人歴のある精神分裂症患者という設定です。左のような挿絵がついています。佐藤信吉が六甲山中、刃物を持って若い男女に迫るシーンです。

一九七一年、このような本が出版されたのです。しかし、一九八八年、文庫版刊行時には、「レンズのない眼鏡」は外されました。当然でしょう。

『夜の歯車』各編紹介

題　初出	『夜の歯車』　各編紹介
狼の血 『小説現代』 昭和43年9月号	●但馬裕一：30代半ば。戦災孤児。「つるべのお秋」と異名を取る、スリの若林秋子に拾われ、悪事を仕込まれるがその道には向いていず、末次運輸で勤続16年。一方、秋子と男女の関係を続けるが、だんだん重荷に。そんな時に、社長の娘・末次満代との縁談が持ち上がる。●若林秋子：40歳を過ぎている。裕一と結婚することも同棲することも考えていないが、裕一を手放す気はない。スリで稼いだ金を元手に闇商売をやって大もうけ、アパートを何軒も持つ。旦那を早くに亡くし、神戸の山本通りの古い洋館に娘の伸子と二人で住む。●若林伸子：大学を卒業したばかり。●島上保：もと刑事の不動産周旋業者。過去を娘の伸子にばらすと、秋子に関係を迫る。他方、裕一には、満代と結婚すれば「挨拶」に行くと凄む 実業之日本社版挿絵　若林秋子と但馬裕一
夜の歯車 『小説宝石』 同43年盛夏特別号	●藤堂志摩子：中学卒業と同時に東京近郊のとある工場に就職。５年勤めたころ、同工場の若い技師で苦み走った顔の津村克巳に胸をときめかす。津村の甘言に乗ってバーに勤め、津村と同棲、捨てられ、転落の人生が続く。流れ流れて、神戸の外人下級船員相手のバー・シードラゴンのホステスに。神戸中山手の路地の外れにあるアパートに住む。津村への「復讐・憤怒」だけが支え。津村が神戸に来ていると知り、殺害を計画、シードラゴンの客、李百文をアリバイ作りに利用しようとするが…。●津村克巳：Ｙ工業から派遣され宅地造成の監督として神戸に来て、現場事務所に寝泊りしている。●李百文：戦時中、重慶飛行場の整備員をしていたころ、仲間と、宝石の密輸に手を染める。インドから宝石を運んでくる軍用輸送機の飛行士、フィッシャーに裏切られ入獄する破目に。フィッシャーへの復讐に燃え、暗殺を計画、志摩子をアリバイ作りに利用しようとするが…。●ヘンリー・フィッシャー：今は、アメリカの貿易会社の神戸駐在員　■宝石密輸(空輸)の話は『相思青花』にも
違った女 『問題小説』 同45年9月号	いささか英語ができ、誰からも好感をもたれるくらいが取柄の平凡な商社員芝村二郎が、接待役をつとめる東南アジア某国からの亡命客セミヤンとセミヤンの女・菊池厚子の無理心中と見える死に疑問を持つ。彼女は芝村の情事の相手でもあり、心中などする女性ではない。自分の判断が誤っていたのか？芝村は、女の本当の姿を知りたいと、知人の間をあれこれ聞いて歩いていると、何故か殺し屋が襲ってきて…　（徳間文庫版「解説」より）
暗い海から 『小説セブン』 同43年9月号	インド人貿易商スハラワルディーは、インドの森でヨガの修行をし、相手を意のままに操ることができた。「深海の底に誘いこむような、青みがかった暗い眼」に魅いられて“初体験”をした35歳の女性・村上芳子は、彼をインストラクターに、「ヨガ健身法」で一儲けを計画する。彼は彼女に青い箱と鍵を渡し「ヨガの会の収入を預かってくれ」と頼む。信用された、男を操っているという自信をもった村上芳子は、かつて自分にみむきもしなかった男に“復讐”しようとする。だが、…　（徳間文庫版「解説」より）
レンズのない眼鏡 『小説現代』 同43年4月号 ※徳間文庫版には収録されていない	●佐藤信吉：41歳。殺人歴のある精神分裂症患者。精神病院から脱走。途中、泥棒に入ったのが弁護士宅で、背広、靴、現金、弁護士バッジと包丁を盗む。その後、眼鏡店で変装用のレンズの無い眼鏡枠を買う。新幹線を使い神戸へ。●滝川房美：線の細い、面長の美人。７年前に夫と死別。２年前に現在の夫・滝川英造と再婚。●岩村啓一：房美と死別した夫との子。高三、美男子。テニスをする。房美の兄に預けられている。母を神聖視する啓一は、房美に冷たく挑戦的である滝川姉弟を憎んでいる。●滝川英造：中小の商事会社社長。●滝川礼子：英造の娘、20歳、Ｋ女子大学のテニス選手。●滝川康男：英造の息子、高三、サッカー選手。**【ストリー展開】**岩村啓一は、ひょんなことから、滝川礼子と再度山へドライブすることに。ところが、途中、とんでもない出来事が…
知らぬが仏 『小説セブン』 同44年10月号	経理担当重役と経理部長の意をうけて、会社の金を横領していた「私」こと、水村開造が、帳簿操作が露顕しそうになり、二人に因果をふくめられて、惚れた女と別れ、死を偽装して逃避行。それから半年、女恋しさにたちもどってみればこはいかに。重役・部長そして女はグルだった。そして自分は思いもよらず殺人犯にしたてあげられ、絶体絶命。が、そこで生まれて初めて人生の充実した瞬間を意識する　（徳間文庫版「解説」より）